

## A-6. 「ふしぎ豆をヘンシンさせよう！」 穴川花園幼稚園(千葉県千葉市) 〈4月～2月〉

幼児は、体験することで学んでいます。五感をつかって、夢中になって楽しむことから科学する心が育まれています。今日、教育環境、食生活など・・・子どもを取り巻く環境は恵まれているようでも、「好き嫌いが多く、お菓子しか食べない」とか「食べることに欲がなく、小食」などのお母さんの声も聞こえます。ところが、幼稚園で友だちといっしょに取り組む体験活動の中では、子どもたちは生き生きとした良い表情をみせます。家庭では食べないものも、自分で栽培したり関わったものには特別な思いをよせていとおしように食べます。こうして、食べ物に関する活動には、特別な意欲や興味を示します。心から楽しんだり、のめりこむような子どもの姿の中には、自ら知ろうとしたり伝えようと表現する『科学する心』があふれ、柔軟で逞しく育つ姿が見られます。

### 実践活動報告

	豆の様子と子どもの活動	先生の援助	子どもが気づいたこと・学んだこと
4月	ヘンシンキングからの挑戦状が届く。作戦会議。	先生は、子どもが興味を持つ“ヘンシン”をキーワードに導入。	挑戦状、作戦会議という言葉に興味をもつ。
5月	畑の土をやわらかくして、タネを蒔く	想像力を育て、楽しみと意欲をかきたてるよう・・・何のタネかはヒミツとする。	イメージを広げ意欲的になる。
6月	観察(豆のような双葉⇒本葉⇒開花昆虫など)	栽培しているものだけでなく、その周囲にも向いている子どもの目を大切に	想像のイメージがどんどんふくらむ。絵を書くことで、さらに細かいことに発見がみられる。
7月	結実し実が膨らむ様子を観る「えだまめ」とみんながわかる。	家庭ややおやにあるものをよく観て見るよう、また分かった事を誉める。これまでのヘンシンぶりを振り返って話し合い、さらにイメージを広げるよう期待をもたせる。	「えだまめ」であったことを知る。考えたり発表したりすることが楽しくなる。
8月	えだまめが太り、一部を収穫して、食べる。	ヘンシンキングを登場させ、「まだヘンシンする」ことを知らせる。期待を促す。	食べたことで、さらに親しみをもち、今後のヘンシンに想像をめぐらす。意欲的に聞いたり調べたりして、話したがる。
9月	実が薄茶いろから黒に変化。実が引き締まって葉が枯れたのを見る。	先生も初体験で動揺！調べ確認しながら、よく観察したり触ったり大切に収穫するように受けとめる。	これまでとは違う、生長ではない実するというヘンシン(枯れてしまった感じ)を知り驚き、戸惑う。返って、いたわる気持ちに変わり、1粒ずつ大切に
	さやを振ると聞こえる音を聞く。大豆であることを知る。	図鑑や、マメの本、豆腐作りの本など、いろいろな資料を置いて見られるようにしておく。	大豆やさやの形、いろ、音などから、いろいろな事を感じ取る。
	「腐っちゃったと思ってドキッ!としたけど、良く見たら、かわいいお豆が並んでいたよ」「もとにもどっちゃったのかなあ?ヘンシンキングが、まだヘンシンするっていったけど・・・?」「ええっ!もしかして、これをまた最初から蒔くっていつのかなあ??」	子どもが、実などを自ら大切にしている姿をよく受け止める。	今までの思い入れから、素直な表現をのびのびするようになる。友だちの発言にも共感し、今後のイメージも楽しんでふくらますようになる。

### その他の活動

- 10月 豆腐作り
- 11月 おからでクッキーをつくる
- 12月 お餅つきに、大豆の枯れた茎を火にくべ、もち米を蒸す
- 2月 節分に、大豆で鬼を追い払う



豆腐作りの実践 (10月29日)

ふしぎ豆の様子	子どもの活動と姿	先生の援助	子どもが気づいたこと・学んだこと
(豆腐作り以前に) 全てが黒いさやになり、さやの中に大豆ができあがる。	実を干し、豆を採り、大豆であることを知る。「こんなに増えちゃったということは、元に戻ったんじゃないかって、1粒のママからこんなにさやの中にならんでる。たくさんのママがふえたってことだね。すごーい!」「これもふえるパワ—アップヘンシンだ!」	これまでのヘンシンぶりを振り返って話したり、今後の期待をうながす。	今後のヘンシンに期待をふくらませて話したり聞いたり、大豆が何に変身するのか、その情報を知ろうと意欲的な姿がたくさん見られる。子どもの様子に、親も一緒に興味をもって、たのしみにする。
ヘンシンさせる前日から、大豆を水に浸ける。		これからお豆腐をつくることは、ヒミツ! にし、興味・関心と期待を集める。	
膨れた大豆を、ミキサーにかけ、くだいた大豆を7分煮る。(煮た物を呉という豆乳・おからが入っている) 	「ぶくぶく、ふわふわ…まるで「かまきりのたまごみたい…」 あーっ! いいにおい! これは??? かまきりでも、おかしでも、牛乳でもなく、お・と・う・ふ のにおい? 「そうだ、おとうふ…?!」「いいにおい!」「おいしいにおい!」	前もって、必要な牛乳パックなどを保護者をお願い。 ※保護者への手紙	一生懸命、誰もが集中! 鼻・目・言葉…の感覚が研ぎ澄まされ、表現力も引き出される。 
豆腐箱に絞り袋をいれ、その中に呉を流し入れ、しぼる。	みんなで熱いおからをしぼったよ。	援助しながらも、出来るだけさわらせ体験できるようにする。	
豆乳が流れ出て、袋のなかには、おからがとれる。	「牛乳みたい!」「豆乳の匂いだ!」	牛乳と豆乳が見た目は似ているが、匂い・原料が違うことに気づくように話す。	日常飲んでいる豆乳に親しみを抱く。おからは、言葉は知っていても食品としてはピンと来てない感じ。
豆乳に、にがりを一気に入れ、十字に切れ込みを入れる…	「魔法がかかった!」	よく見せて、期待を高める話し方をする。	にがりの存在を知り、その力や不思議さに驚いたり興味を持ったりする。
澄んだ水が出てくる。これを、70度に熱して型に入れます。	「なんか固まってヘンシンしてる!」	上に同じ	温度計を用いて、温度や度数に興味を抱く。
牛乳パックの型にガーゼをかぶせ、20分まつ。	子どもたちは、かずを数え始めたり、時計をみたり、思い思いの20分を計る。	「20分は長い針がここまでかな?」「60まで数えて1分。それを20回分ですわね」	生活のなかで、しぜんに時間に興味関心をもち、必要性を学ぶ。
固まる。とうとう、大豆がお豆腐にヘンシン! できあがり。 	「おとうふだ! やっぱり…」 「ほんものおとうふだ!」	先生は子どもたちと確認。ヘンシンキングからもらった「ふしぎママ」は、どんどん伸びて「えだまめ」にヘンシン! 「えだまめ」は、畑で「だいず」に。	予想を立てていた子どもが多かったようだが、「びっくりした!」というのが本音。
	おとうふを味わう! 「おいしい!」「いままで食べたおとうふでいちばんおいしい!」	「だいず」は、なんと「おとうふ」にヘンシンしたのです!	喜び。楽しいと共感。
	「あまいあじがする!」「世界中で、ただひとつのおとうふの味、だから甘いのかなあ…!」	子どもたちが、ひとつの目標に向かって、できたことを話す。	満足感。充実感を味わう。大豆のヘンシンぶりにおどろいたり、おいさに感動したり…。小さいおともだちに尊敬されたり…。うれしい、良い体験となる。

ポイント

ヘンシンをキーワードに、大豆の栽培から、調理・文化活動まで年間を通して活動がされています。ヘンシンキングからの挑戦状は、子どもたちにとって、どれだけ夢を与え、興味関心を高めるのに役立ったことかと思えます。事例の中には載せることができませんでしたが、ヘンシンキングから、大豆の枯れ枝を残すようにという指示があり、それを餅つきの薪に使い、あますことなく大豆を用いています。